南波止場1番地

鈴木志郎康のb2evolution blogです

アーカイブ: 2009年8月

2009/08/27

17:25:19, カテゴリ: memo, views: 5214

森ミキエ詩集『沿線植物』の感想

森ミキエ詩集『沿線植物』は、勤めと家庭を持つ四十代の女性が、日常生活の中で失われがちな自意識を詩を書くことによって保とうとして書かれたものと思われる26編の詩を収めた109頁の詩集で、その内の11編が行分けで書かれ、10編が散文で書かれている。読み終えて、もう一度各作品を振り返ってみると、行分け詩と散文詩に書き分けられたのは、内容に共通する違いがあることに気がついた。行分けの詩は、現実の場面に作者が立ち会っていて、そこで幻覚か幻覚に近い感じを持ったことが、行を分けてリズムをつけて語られているのに対して、散文で書かれた詩は、作者の頭の中で終始する妄想や妄想になっていく現実

が語られることが多いように思えた。いずれにしろ、四十代の女性が日常生活の中で生命感を得て生きる力にするために、自分の中に浮かんだ幻覚や幻想を言葉で書き表すことによって詩というものを成立させているわけである。現在、詩という表現が機能している一つのあり方をここに見ることができよう。

最初の詩は、「午後の図書室」という行分けの詩で、「ひらいた本のページをよぎる鳥影の速さ／中空に消える血の速さ」と書き始められて、何気なく手にした知らない横文字の古い本の中に、「黒抜きになって　すわっている二羽のうさぎのうしろ姿」を見つけるが、もう一度見ようとするともう見つからなくなる。また空白のページに出会い、空白を一つの表現と思ったりする。心がざわめき、ざわめきは駅前広場の情景に続き、そこで若い自分が「どうぞ　わが家へ　ようこそ　わが家へ」と書かれたビラを配っている。わが家って何処だろう、と思う。捨てられたビラは風に飛ばされる。幻覚だった。本を閉じ、また開くが、もう空白のページは見つからない。何故自分がここに来たのかも忘れいる。そして詩の最後は「ガラス越しの晴天／さがしものが　はじまる」で終わる。

この詩は、森ミキエさんの詩のあり方を諷喩として語っていると受け止めることができる。図書室は言葉のある場所、そこで解らない文字で書かれた古い本を手にする、つまり難解な詩の本を手にする、その本の中に「すわっている二羽のうさぎのうしろ姿」の絵を見つける、何の喩えか不明だが、小動物の姿として心が癒されるイメージ、次に空白のページに自分の家に人を誘うビラ配りする若い自分の幻覚をみる、自分への関心を求める、そしてさがしものを始める、つまり言葉を探して詩を書く、ということ、というふうに解釈できる。書き手としては、こんな意味合いを追って書いたのではなく、内心で感じている不安と緊張を、言葉が産み出すイメージにして追って書き進んだと思われる。

読む方は意味を求めたくなるが、書く方は、意味よりも言葉が呼び出すイメージを追って、ある意味ではイメージを辿る旅をするように、またある意味ではイメージのぶつかり合いが生む緊張感を内心で楽しみながら、自分自身の姿に衣装を合わせて鏡に映してみるようにセルフイメージを作って行くようだ。

南波止場1番地

南波止場1番地の鈴木志郎康の家

- 最新 (キャッシュ)
- 最新 (キャッシュされない)

2009年8月

日	月	火	水	木
2	3	4	5	6
9	10	11	12	13
16	17	18	19	20
23	24	25	26	27
30	31			
<<	<			

- 最近のコメント

詩集の三番目の詩「薔薇の地形」は、自分の頭の中に湧き起こった妄想を言葉にして語るのを楽しみながら、イメージがもたらす緊張感を乗り越えるようにして書かれた散文詩の力作だと云えよう。

この詩は、「夜、口中にバラの花が宿る」という一行で始まる。この口の中のバラの花が開いていくという妄想と、海岸線を娘と辿る間に娘がどんどん成長して手の届かない存在になっていくという妄想が、交互にカットバックする構成で書かれている。口の中のバラの蕾を舌でなぞっていくと花びらが開く、そしてそれが男の舌先だと気づき、男はくの字に体を曲げて眠っていて、その足元に妊娠した娘が蹲っていて、私は二十歳の娘と同じくらいに若く、娘に隠れて男にキスをする、男は私たちを置き去りにする。そして口中のバラは花が開き、朽ちても、口から抜けないので、深呼吸しながら、服を脱ぎ、耳を剥ぎ眼球を取り、骨盤を弛め、体が軽くなり、浮かぶかと思うほど楽になる。

一方、娘と私の方の妄想は、「私の踵は硬く罅割れて皮が剥けて痛いから、五歳になった娘を杖のようにして寄りかかって、歩いていく」と娘を分身のように感じているが、娘は私を置き去りにしたり駆け戻ったりしているうちに、迷路に入って、行く道を娘が嘘ついているのかと疑うようになり、娘の成長を感じる。そこで、男とのシーンに重なって、身重の娘は私を背負って急勾配を登り駆け下りて、必死に出産のための場所を求める。崩れる崖の縁で、娘は私を放置して行ってしまうが、這うように進んで、娘の足首を掴むと、ふくらはぎは鬱血して、赤い花びらがはらはらと霧の底に落ちていく。私はもう放置されたままでいることにすると、「口中でバラがの花がひらく」とバラに重なる。

心の中に働く「女性性」と「母性」の葛藤が、言葉で具体的なイメージを探りながら語られていると言えることなのかも知れない。自分の身体の一部のように思っていた娘が、自分を離れて、自分に嘘をつき、男と関係を持ち身籠もってしまい、生むために自分を危ないところに放置して立ち去ってしまう。そこでバラが開き、身が軽くなるという、つまり、女性の自分が性的な縛りから解放されたという自覚を持つに到ったということなのかも知れない。

「薔薇の地形」の次の現実の母娘関係を妄想のように語った散文詩「布の話」には、母親である自分には手に負えなくなった娘が女性としての存在と受け止めるに到ることが語られている。「私」は、「環状に結ばれたレールを一日に何周もする」、つまりJR山手線に乗ってぐるぐる何度も廻っている。一方では「私の十三歳の娘はリリアンばかりしている」、つまり「誰とも話さず家にこもって編み機を回し続け」家中のセーターなどを解いて、それでリリアン編みの紐を作り続けているのだ。引きこもり娘と母親、この母娘関係にある「私」は電車の中で外国人の赤いターバンに出会い、綿の花を摘む手や、また糸繰り車を回す手を想像し、自分の家にあるあらゆる布製の着るものを想像し、そこに電車の車輪の回転、山手線の周回、娘の編み機の回転、想像の糸繰り車の回転と、布を織るための回転と心理の回転がが重なる。異常な母娘関係が単に語られているだけでなく、「私」の想念が女性が手がける布の記憶へと伸びていくのだ。そしてその想念が女性という者の存在のあり方に至ったとき、娘の女性としての成長を感じるというわけである。

詩集『沿線植物』の詩は、現実の身を置いている作者が、そこで感じたり、心に浮かんでくる幻覚や妄想を、それを楽しみながら、一面では道具として、自身の女性という存在のあり方を掘り下げて行く場になっていると言えよう。「シャワー」という詩では、「あなたの歌う声が聞こえなくなったから／そうだ、私は未亡人になろう」と喪服を着て外に出て、過去を忘れ、解放された気分を味わうというものだが、女の人ってそういうものかと、男性とは違った束縛感を持って生きているのを感じさせられた。詩集『沿線植物』は自分を見つめて生活している人の姿が感じられて読み応えがあった。

Heavy Hitters

- 白鳥信也詩集『ウォー
カー』の詩の解題 (13 vi
- <h2>愛を生ききる台詞
水邦夫の戯曲について
- 長尾高弘詩集『右向け
年4月6日発行） (10 visits
- 「第6回萩原朔太郎賞受
鈴木志郎康」に行っ
visits)
- 坪田義史監督作品『美
気分』「ガロ」の漫画
の境涯 (8 visits)
- 渡辺洋詩集『向日　歌
肆山田2010年刊）の感
- 森ミキエ詩集『沿線植
visits)
- 須永紀子詩集『空の庭、
想 (6 visits)
- 五十嵐倫子詩集『色ト
の感想 (6 visits)
- 南原充士詩集『笑顔の
(6 visits)
- 表現の現前性(多摩美術
劇学科年報「映像演劇
visits)
- Ex@lorerからの書き込

検索

全ての語
いずれかの語
フレーズ
検索

カテゴリ

- All
- memo (24)
- 日記 (4)

選択

アーカイブ

• 編集

2009/08/10

21:54:23, カテゴリ: memo, views: 2534

五十嵐倫子詩集『色トリドリの夜』の感想

若い独身女性の生活と真情が、自分の生きる方向性を予感するところまで、工夫した言葉遣いで語られている十九編の詩を収めた103頁の詩集。生活と真情を語るといっても単に思いを述べるというのでなく、生活していて出会った場面や情景の中に自分を置いて、人々の姿や物事や事柄に比喩的な意味合いを重ねて、自分の真情をうきぼりにして、読者に手渡す。

最初の詩「いつも一緒」では、朝、パパと手を繋いで坂道をスキップして歩いていく幼稚園児、犬と一緒に散歩する老人、そして「私」は一人でヘッドフォンから流れる音楽と一緒だと語って、それぞれの姿と比べて、自分が現在置かれている自立しているがちょと寂しい人生の位置と気持を感じさせるように語りを展開している。

二番目の詩「タイムカード」では打刻に向かって走り追いかけるが、それがそのまま競争社会の生活態度や思いの持ち方の比喩になる。三番目の「ファンデーション」では化粧室で開いたファンデーションが砕けてしまったという小さな事件で、ファンデーションで自分を新しくするかどうかの問題が浮上してくる。「ココロとカラダ」では、夕飯を食べに行った定食屋でいろいろ人たちの間を通り抜けて「窓側のカウンターへ／お一人様の／特等席」に座って、窓ガラスの外の通過する人や車を見ているうちに、食べた料理の肉も野菜も通り過ぎてしまい、ココロが遊離して、カラダはその器になって空の器のままで電車の終点まで行って、ココロを呼び戻したと語られている。読者として敢えて言えば、大衆社会に生きて自分の人生をどう生きればよいかを、語られる言葉の裏側で探していると言える。

十三番目の詩「ゆらゆらの日」には、空に引かれた飛行機雲を見て、突然不安に襲われた時、孤独な時間を過ごすことで、自分の手で言葉を掴んだということが語られている。勤めを休んで、部屋に引きこもって詩集を読んでいると、その言葉が水のように部屋を充たして、自分がゆらゆらと浮き上がり、管理されたプールで泳いでいる想像に身を任せて、監視員の制止を破って飛び込み泳ぎ切ると、足が立たないが、このまま外にも自由に泳いでいけるという気になれる。水から上がると、その手のひらに言葉が残っていた。と語られている。言葉を生きることを見つけたというわけだ。

詩集の題名になっている「色トリドリの夜」という言葉が出てくる詩「振替乗車」は、勤めの帰りに乗っていた電車が急に不通になって別の路線の電車に振替乗車することになり、どの路線を取ればいいか、損得を勘案していろいろと考える、その路線を電車の色で語る詩なのだが、最後に「振替」ということを自分の人生のことに振り替えて語り終わる。「振り返られた私は／好きな色で塗り替えていく／黒く光る道を／緑でぬろう（稲穂がいざなう／青でぬろう　（出航だ！／一歩踏み出せば／つま先から色が広がっていく／／色トリドリの夜／／いいえ、私は振り替えられていない／誰にも頼らずにこうして歩いている／塗り替えられたその先へ／私が歩いていく」

「あとがき」に一節に、次のように書かれている。

「詩は私の中から浮かんできた言葉に耳を傾けながら書いてきましたが、どこかで過去のワタシから変わりたいという思いが芽生えてきていたのでしょう。どんなに暗い夜でも、一歩踏み出せば色トリドリの道がひらけるのだと、詩の中で気づけたから、またここから新しい旅に出てゆけそ

- 2013年4月 (1)
- 2010年8月 (1)
- 2009年8月 (2)
- 2009年7月 (2)
- 2008年12月 (1)
- 2008年10月 (1)
- 2008年9月 (3)
- 2007年12月 (1)
- 2007年11月 (2)
- 2007年10月 (3)
- 2007年5月 (1)
- 2006年6月 (3)
- 続き...

いろいろ

- 管理
- プロフィール (admin)
- ログアウト (admin)

このブログの配信

- RSS 0.92: 投稿, コメン
- RSS 1.0: 投稿, コメント
- RSS 2.0: 投稿, コメント
- Atom: 投稿, コメント

What is RSS?

powered by b2evolution

うです。」
　この「新しい旅」というのは、準備中の「Poem & Reading Cafe 中庭ノ空」のことだと思う。五十嵐倫子さんからは、以前から、詩集が置いてあって、朗読会などを開ける「ポエカフェ」を開きたいという話を聞いていた。彼女のmixiの日記には、コーヒーや料理や経営の講習を受けに行ったりしたことや、店を開く場所を探していろいろな街を歩いたりしていることが書かれている。ということは、五十嵐さんの「ここから新しい旅」というのは、詩を書くだけでなく、詩を書く人が集まってきて詩集を読んだり朗読したりする場所を実現するということなのだろう。それは、詩が多様化した時代に、「色トリドリの」詩を一つのところに集まって受容できる現実の場所を持つということだ。詩を書く者が集まるところは同人誌だが、五十嵐さんは詩を読む人たちが集まる「ポエカフェ」を作ろうというわけだ。確かに、色トリドリの道がひらける「新しい旅」の始まりだ。詩を書くことから、詩の現実的な空間を拓く旅だ。「Poem & Reading Cafe 中庭ノ空」の開設と新たな詩の展開を期待する。

• 編集

Original template design by Fran?ois PLANQUE.